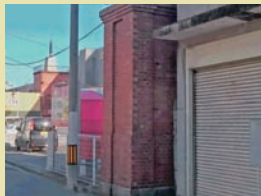


横浜銀行高崎支店

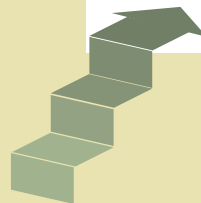
群馬県で初めての銀行



茂木惣兵衛が設立した銀行は横浜銀行に統合され、現在は連雀町に移転。九蔵町のレンガ塀が往時を伝える



江戸末期、高崎に生まれた丁稚の少年は、開港まもない横浜で名を上げ、後に「西の伊藤忠兵衛、東の茂木惣兵衛」と言われる豪商となった。



横浜の豪商茂木惣兵衛を生んだ高崎

●横浜で名を上げた茂木惣兵衛

茂木惣兵衛は、文政10年（1827）に高崎の古着商に生まれた。12歳で呉服屋に奉公し、開港間もない横浜で生糸貿易商として才覚を発揮し、野澤屋惣兵衛と名乗って頭角を現した。

生糸は日本の外貨獲得のための重要な輸出品で、各地から進取の精神にあふれた商人が横浜に集まり、外国商社が立ち並ぶと、寒村だった横浜は一変した。横浜にいち早く目をつけたのは上州商人の中居屋重兵衛で「走り屋」と呼ばれる冒険的な商売だったが、日本の生糸を世界市場に売り込む先鞭となった。

生糸は大産地の上州が牛耳るようになり、明治に入ると上州産生糸のシェアは約5割を占めた。一攫千金を狙う海外貿易で生糸商の興亡は激しかったが、惣兵衛の取扱量は横浜随一となり、横浜財界の親分格、原善三郎と並ぶ大富豪として横浜商人の逸物といわれた。

●新しい時代を開いたパイオニア

貿易の主導権はアジアで経験を積んできた外国商人に握られ、為替取引も海外金融機関に独占され、日本の商人の不利益は大きかった。

惣兵衛と原は、国際化に対応したビジネスの必要性を強く感じ、新しい時代のリーダーとして横浜を引っ張った。海外金融機関に対抗するとともに資金調達を円滑にするため、日本で最初の近代的銀行事業とされる横浜為替会社を明治2年（1869）に設立した。この会社は、明治7年に第二国立銀行に改組するが、国立銀行は国の法（当時は条例）に基づく民間銀行のことで、この時に4つの銀行が設立された。第二国立銀行は他の3行と大きく異なり、洋銀券・ドル紙幣の発行を許された国内唯一の銀行で、原善三郎が頭取、惣兵衛は副頭取となった。

●私財を社会に生かした実業家

第二国立銀行頭取の原も群馬に近

い埼玉県神川町の出身で、惣兵衛の他にも群馬出身の横浜商人が株主に名を連ね、群馬と横浜の生糸商人の關係が非常に深く、明治8年に生糸取引の拠点となる高崎に群馬県内初の銀行として高崎支店が九蔵町に開設された。高崎支店はルネッサンス様式の赤レンガの建物が目をひき、群馬の発展に大きく寄与した。

惣兵衛は火事で焼け出された人金を与え、学校や道路に多額の寄付も行い、市民から博愛家と尊敬されたという。惣兵衛の出資で造成された熱海梅園は、皇室へ献上後、熱海市に無償譲渡されている。惣兵衛は66歳で亡くなったが、遺志により葬儀は質素で、貧しい人5千人に米代50銭が配られた。最後まで社会に尽くした実業家であった。惣兵衛の築いた野澤屋の建物は横浜松坂屋に継承された。

第二国立銀行のほか惣兵衛の関わった銀行は合併統合され、昭和32年に「横浜銀行」と改称し、現在は連雀町に高崎支店を置いている。

